

『天使の相談室』

～ フィロソフィカル・カウンセリング ～

【おわりに】

哲学というものは、本来、人生の上で、いかに生きるべきかということに対して答えを与えてゆくものでもある。かのソクラテスの「善く生きること」が、哲学の柱の一つであることは、言うまでもないことである。

マルクス・アウレリウス・アントニヌスが教えて下さるのも、主として、この「善く生きる」ということである。人間は、特定の職業を持つ人間である前に、「善く生きる」人格でなければならないと思う。それは、永遠普遍の真理、真実であろう。

哲学的に云えば、この聖霊の御言葉は、叡智界よりの、「かくあるべし」という、永遠普遍の道德律としての定言的命法であると言えるかもしれない。実践理性の意志表示こそが、私にとっての聖霊の声でもあるのである。

アウレリウスのレリーフには、背中の中に、よく天使の姿が描かれているものである。そのように、アウレリウスは、御生前において、常に天使と共にあり、神と共にあられた方であったのであらうと思われる。

そして、日々、「瞑想録」を記しながら、自らを戒め、自己省察されていたのであろう。常に指導理性と共にあられ、自らの地上的な生を超越されて、天上的な生を全うされていたのであろうと思う。

天使の實在というものは、確かに、カントの云うとおり、「物自体」のものかもしれない。人間によって、直接、認識されにくい存在であるのかもしれない。

しかし、天使の啓示というものは、永遠普遍に實在しつづけるものである。そして、その啓示の内容が、深く、高く、広く、崇高であり、真理そのもの、理念そのものであった時には、その御言葉の背後に、天使の存在を確認し、神々の存在を確認し、神の存在を確認し、魂の不死を確認出来るものであろうと思っている。

故に、本書を通じて、天使は實在するのである、聖霊は實在するのであるということも、言いたかったことなのである。

稲盛和夫さんに、「あなたには確かに天の声が聴こえている。後は、それを理性的に統御してゆくことが大切である。」と云われたことがあったが、こうした天の声を認めて下さる方も多い。

そして、その内容を通して、一つの信仰心というものが根付くのであろう。
そして、かのトマス・アキナスが、「信仰と理性」について述べられているように、理性的に洞察してゆくことの大切さというものも生まれるのであろうと思う。

本書を通じて、聖霊と共に道を歩みたいと思われた方は、どうか、使徒会員になって頂きたいと思う。それが、聖霊からのコーリングである。

限りなく哲学的に、かつ、限りなく柔軟に、かつ、限りなく敬虔に、善く生きることを実践しつつゆくことは、万人の課題であると確信するものである。

本書を出版する機縁となった全ての方に、心よりの感謝の念を捧げる次第である。有難うございました。